

日台青年交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成24年11月26日から12月4日まで台湾で東アジアを対象とする地域研究（国際関係や安全保障等の人文社会科学分野）を学んでいる大学院生19名を大学での日本人学生との交流、現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために東京、神奈川、京都、滋賀に招聘しました。

日本では東京大学、神奈川大学、立命館大学における日台の学生による意見交換、施設見学及び訪問先での意見交換等また、文化体験では、ホームステイ、座禅、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した19名のうち、男性3名女性3名の訪日報告書をご紹介します。

異なる日本を見る

国立台湾大学 政治学研究所
修士課程2年 徐圓媛



2012年11月26日、飛行機を降りて羽田空港に到着し、一瞬で10度も気温の下がった空気を吸い込むと、全身が充実感と期待で満たされ、体の感覚と心境の変化が、自分が日本にいることを教えてくれました。

どの機関の見学でも数多くの収穫があり、防衛省防衛研究所の報告を直接聞くことができ、わからないことに関しては直接質問することもできました。それぞれの質問について、専門分野の研究員の方が回答と補足をして下さり、一般的な自由旅行では到底味わうことのできない旅になりました。一回一回の非常に充実した授業が、本当に貴重なものを感じられました。経済産業省産業構造課でのブリーフィングで、日本の経済政策決定のプロセスと、現在直面している困難について聞くことができました。日本は失われた10年を経験しましたが、ブリーフィングをして下さった方は、

実に楽観的に日本の産業競争における優位性をご紹介します。試練にさらされてはいるものの、正しいと考えることを継続し続ける、それはプロとして学ぶということ以外にも、一種の民族の精神的悟りともいえるべきものなのでしょう。

3日目には学術交流会が激しく繰り広げられました。自分の発表以外にも、それぞれの学術交流会では台日両方の学生の演題を聞くことができました。これまであまり関心を向けていなかったテーマを数多く発見することができ、将来における自分の研究上の視野を広げることができました。自分が関心を寄せる研究テーマで、先生からのご意見を聞くことができるのは本当に貴重な機会です。比べてみると、台湾でお話を聞いていた先生のアドバイスと今回の発表会での先生のご意見は異なる部分もあり、別の切り口から考えることで、異なる学術圏で訓練を受けた者の異なる角度と観点を、身を持って感じることができ、このような刺激を受けるのも実におもしろいと思いました。

浅草では、赤く大きな雷門のところに立って、仲見世の左右にある屋台を眺めていました。提灯が掲げられ、人形焼やせんべい、お団子など、目移りするほどたくさんのものであり、どれも魅力的です。人が途絶えることなく大勢行き交う、こ

れも賑やかな東京の一面なのです。浅草からそう遠くない場所に、東京の新しいランドマーク、東京スカイツリーがそびえ立っていました。今年5月に開業した、世界一高い塔から眺める東京の美しい夜景は、自分で登って見なければ決して感じることはできません。ワクワクしながらエレベーターに乗り込み、340mの高さまで登って東京の街を見ると、碁盤上に広がる街を一瞬にして見渡すことができ、整然とした街路、東京の街全体を一望することができました。夜に瞬く街の明かりも幻想的な美しさを添えています。ここが、憧れの街、東京でした。東京タワーも碁盤の片隅に立っていて、高い東京タワーもスカイツリーに比べると小さな駒のように見えて、うっとりするような夜景でした。

妙心寺の門をくぐると、あたりの静謐な雰囲気の影響されて、瞬く間に心も落ち着いてしまいました。苦しい修行生活を送る方は、一日に3時間しか眠ることができず、このように厳しく自分を律する生活をずっと続けられるそうで、本当に感心してしまいました。木の板の音が1つ、鈴の音が3つ響いてから、坐禅を組みます。頭の中ではお坊さんのおっしゃった「空にならなければ新しいものを入れることはできない」という言葉が響いていました。わずか15分間でしたが、坐禅を通じて、にわかに心が洗われた安心感が湧き上がって来ました。今はいつも慌ただしい生活を送っており、ゆっくり物を考える時間もなく、自分は何を求めているのかもわかりません。もう少し自分と向き合う時間を持つべきなのでしょう。お坊さんも、坐禅で大切なのは場所ではない、気持ちさえあればいつでも禅の世界に入れるとおっしゃっていました。

嵐山の渡月橋は行き交う人や車でいっぱい、渡月橋に沿ってゆっくり歩いて行こうとした瞬間、亀山上皇が「くまなき月の渡るに似る」と感



じた心境を理解しました。橋の左右両側はそれぞれ異なった風景が広がり、一方は赤や黄色のグラデーションに染め上げられた山、一方では川の水がさらさらと流れ、とても一ヶ所をじっと眺めてなどいられません。嵐山がこの旅の美のクライマックスだと思っていましたが、龍安寺の庭園にある楓の木を見ると、どちらも甲乙つけがたく、悩んでしまいました。不意に、日本ではどこでも美しい楓が見られることを羨ましく思いました。赤黄入り混じった木の下で、皆思わずカメラを握りしめて、忘れられない紅葉を撮影していました。今でも、楓の葉が静かな湖面に逆さにくっきりと映った姿が、頭に焼き付いています。

世界の人たちに戦争の恐ろしさ、醜い面を知ってもらおう、これが立命館大学国際平和ミュージアムの伝えたい思いです。ミュージアムでは、日本の加害者、被害者としての角度から、過去の苦痛に満ちた歴史の記憶を展示しており、平和の意味について深く考えさせられました。ガイドの方の口ぶりからは、日本の若者の政治、国家の発展に対する無関心に対する失望が感じ取られましたが、館内では小中学生が真剣に展示を見学していました。あるいは、彼らのような幼い子どもたちが、日本の望む未来に向けてと成長していくのかもしれない。日本は現在でも国際政治の舞台で

自らの立ち位置を探していますが、今後日本がどのように発展していくかは大変気になるところです。しかし、平和の真の意味を理解することは、あらゆる国にとってプラスの方向への前進になると思います。

最初の数日間とは異なり、バスが走る道はどんどんと狭くなり、周囲の視界が広がって、田んぼや山が目飛び込んできました。あちこちでタヌキの足跡が見られました。民泊の体験では、歴史文化の香り深い、かつての近江の国—滋賀県を訪れました。日野町の太鼓、笛の合奏による歓迎式の後、私たちは初めて民泊先の家族と対面しました。お母さんとお姉さん、妹さんが温かな笑顔で私たちを出迎えてくれて、日本人の家庭で夢いっぱい生活体験が始まりました。家族の方たちと一緒にスーパーへ行って夕食の買い物をし、一緒に夕食を食べる時間になりました。わずか数時間の間に、家族の一員になってしまったような親しみを覚えました。夕食後、お父さんが毛筆で「歓迎你們来日野、见到你們很高兴」(日野へようこそ、お会いできて嬉しいです)と書いた字の飾ってある客間で、こたつに入ってお母さんから折り紙を習い、テレビを見ました。お父さんから台湾に行ったときの写真とともに、面白かった場所の思い出を聞かせてもらい、次に台湾に来るときは地元の人間として、台湾の美しい場所を案内することを約束しました。わずか一日の体験が終わり、最後に家を離れるときにはおばあさんとしっかり両手で握手をし、また日本と台湾で会うことを約束しました。たった一日一緒にいただけですが、この友情はきっと一生続きます。

京都は本当に特別な街で、高層ビルもなく、家もあまり高くないので圧迫感がなくて心地よかったです。バスから延々と続く鴨川を眺めていると、涼しさを感じられるような気がしました。今回は、テレビでしか見ることのできなかつた着物



を体験する機会があり、わくわくしていました。メンバーたちが皆着物に着替えたのを見ると、色彩は鮮やかですが、俗っぽくなく、清水の舞台と実に合っていました。日本のお寺は台湾と違い、線香の煙が少なく、静かな印象がありました。途中の清水寺の通りにあった八橋、抹茶、和菓子、陶磁器などはどれも京都の名産品で、古色蒼然たる雰囲気がありました。京都では、実体的な物だけでなく、文化的なものを感じることもできました。建物のせいでしょうか、時空を超えて古代にやってきたような感覚がありました。この街の息遣いは、別の街にはない、実に特別なものがあります。京都は夜になるとさらに美しく、京都タワーや、京都駅から列車が次々に発車していく様子、隣のにぎやかなデパートやホテルの灯りは、これ以上ないほど美しいものでした。

帰国した今も、体には日本の旅の痕跡が残っています。今回の日本での旅は、4年前よりもさらに多くのものを得ることができ、たくさんのエネルギーをもらいました。まだ日本について本当に詳しく理解したとは言えませんが、文化や政治、経済、社会といった多くの分野に触れ、たくさんのヒントを得ることができました。今後も日本を探索していくための扉を開いてくれたのです。最後に、交流協会からこのような機会を頂けたこと、



再び新たな日本に出会えたことに感謝申し上げます。数年後の私が、このことによってどのような認識を持つようになっているか、楽しみにしています。

2012 年度台湾大学院生訪日団（東アジア研究）成果報告書

国立台湾大学 政治研究所
修士課程 2 年 張祐寧



じんかん
「人間誰か道う別離難しと、百歳の光陰指一弾、只桃花の為に旧好を訂す、李白をして長安に酔わしむることなかれ。風は遠樹に吹きて南枝暖かに、浪は高樓を撼かして北斗寒し。天地有情春合に識るべし、今年今日又歡びを成す。」
—夏目漱石『木屑集』、「無題」。

北国日本：近いように感じられて、実際は縁遠い国
地理的にも歴史的にも、日本と台湾は密接な関係にあり、さらに近年では両国の観光や貿易の往来が日増しに緊密になっているため、日本は台湾にとってそれほど遠い国ではないように感じられます。しかし、今回の訪日団での活動で、自ら日本という国に足を踏み入れてみると、私たちの日

本に対する理解は非常に浅いことに気づきました。

これまでの日本への理解はいずれも「本の中の日本」、「ネット上の日本」、さらには「メディアの中の日本」に留まり、自ら「実際の日本」を経験する機会はなく、幼い頃に 2 回旅行で訪れたことはあるものの、単に急ぎ足で見て回ったにすぎませんでした。今回は交流協会主催による「2012 年度台湾大学院生訪日団（東アジア研究）」という行事に参加し、十数年ぶりに日本を訪れることができました。私は謙虚な心で、台湾が学ぶべき日本の優れた点を観察しました。

1 つ目は「細やかさ」です。初日の晩に、交流協会本部が銀座で歓迎会を開いて下さいましたが、ドアを入るとすでに座席が割り振られ、テーブルにはそれぞれの名札が並べてあり、「家に帰ったかのような居心地の良さ」を感じることができました。この点からも日本人の細やかさと気配りを、身をもって感じることができました。

2 つ目は「時間に正確であること」です。日本人に比べ、台湾人は当たり前のように遅刻してしまいます。日本行きの数日前には、毎回のよう集合時間の 10 数分後になってようやく集合が完了していました。これは日本人にとっては非常に重大なことで、団体行動であればなおさらのことです。ここで、引率の一人であった交流協会本部の T さんが繰り返し教え諭して下さいたことに感謝いたします。T さんからは、時間を重視する日本人の習慣をしっかりと学ぶことができました。

3 つ目は、「礼儀作法」です。台湾でも日本人は非常に礼儀正しいと聞いていましたが、自ら体験したことはなかったため、最初はあまり意識してはいませんでした。経済産業省を訪問した後、ブリーフィングをして下さった課長さんがバスまで見送って下さり、発車まで手を振ってお辞儀までして私たちに挨拶して下さい、決して役人風を吹

かせることのないその様子を見て、日本人が本当に礼儀正しいことを理解しました。

学術交流：お互いへの理解を深める

私にとって、今回の訪日団にとって最大の意義は日本の先生や学生との学術交流で、やはりこのような国際交流の場面は極めて貴重なものです。最初の東京大学では、川島真准教授ご本人が流暢な中国語をお話しになり、東アジアや中台のテーマにも実に詳しく、しかも川島先生の教えている院生たちのほとんどが台湾に来たことがあり、交換留学生として台湾に行かれていたことには驚かされました。そのため、一緒にいてもこの上ない親近感を覚えましたし、言葉の壁によって交流のチャンスを逃してしまうこともありませんでした。また、私たちが東京大学東洋文化研究所に行った時に講義を下さった松田康博教授は、中台の学術界でも非常に有名な方で、「日本の視点から見る東アジア戦略の構築」に関するブリーフィングは気軽にユーモラス、そして流暢な中国語で語って下さり、強く印象に残っています。

その次は神奈川大学で学術交流を行いました。事前に、学長の中島三千男先生が自ら応対を下されると伺っており、最初はややびっくりして、楽しみに思っていました。その後、中島学長が台湾好きであることがわかり、台湾の各大学を訪問したときの写真を見せて頂きました。日本による台湾の植民地時代における歴史研究の論文まで送って下さり、先生がどれだけ台湾が好きかということがよくわかりました。このことからわかるとおり、台日間にはいまだ一部の歴史的、政治的問題がありますが、このような争いがありつつも、お互いの交流は少しも損なわれてはいません。双方がこの貴重な友好関係を大切にすべきだと思います。

最後は京都の立命館大学でした。会場に入ると、背景が台北 101 となった「東アジアの未来：

日本と台湾の対話」というポスターがあり、発表する学生のテーマと名前が印刷され、発表者がしっかりと尊重されていました。このことから、立命館大学が今回の学術交流を重視していることが感じられました。

民泊：庶民の生活を体験する貴重な機会

今回の訪日団で最も貴重だったのが、「民泊体験」だったと思います。普通であれば、観光であろうとビジネスであろうと、親戚や友人が日本にいない限りは一般の日本人の生活を体験する機会などありません。そして、私たちを招待して下さいしたのは、Yさん夫妻一家でした。Yさんは木工職人で、そのため様々な芸術品が好きで、私たちにもこれまでコレクションしてきた様々な骨董品を見せて下さいました。私たちは驚き、興奮し、まるで博物館のようなYさんの家を絶賛しました。夕食後、日本に関する様々な話題についてお話をしました。中国と日本の歴史、東アジアの政治から台日間の様々な違いなど、何でも語り合いましたが、Yさんはとても見識が高く、しっかりとした意見をお持ちの方でした。そのため、私たちはYさんに「談古論今、如獲至宝、不虛此行（古今を論じ、得たものは宝のように尊く、今回の旅に来た価値がありました）」とする祝福の言葉を残しました。Yさんほど中国文化に深く接している方であれば、きっとその意味するところを理解して頂けるはずです。ここでもY夫妻のご招待に感謝を申し上げたいと思います。

平和学習：民族の歴史に対する反省を見届ける

最後に、私にとってもっとも大きな収穫となったのは、立命館大学国際平和ミュージアムでした。日本の歴史と政治についてはある程度本で読んだことがありましたので、館内の展示やガイドさんの解説を聞くとことのほか感慨深いものがありました。過去に他国を侵略した歴史を持つものの、



上：民泊先の横井さんとの記念写真



上：東京大学駒場キャンパスでの学术交流

日本人がそれを反省し、慎み深く次の世代にこの歴史的悲劇を伝え、同じことを繰り返さぬよう願っていることを目にして、深く感動しました。ガイドさんに日本人の平和憲法と現在の政治に対する見方を質問すると、おじいさんは30分近くもかけて答えて下さいました。その中で、現代日本の若者の政治に対する冷淡さについて語られていましたが、日本の上の世代の方たちが国の前途を心配しているのを感じました。台湾の若い世代に自国の社会に関心を持ってもらうための、またとない手本であると思いました。

一期一会：過去を細かく検討するが、今日を見ずえる

日本の茶道家、千利休は「一期一会」と言いました。人は一生の間に他者と一度しか会うことができないのだから、共に過ごす機会を大切にしなければならぬという意味です。今回の訪日団の行事で、出会った様々な方たちに、私たちはこれきり会う機会はないかもしれません。だからこそ日本の土地や人々の気持ちをしっかりと理解したい、それが私の持ち続けていた信念でした。防衛省防衛研究所、経済産業省、あるいは清水寺から居酒屋まで、すべて同様です。

台湾大学院生訪日団参加レポート

国立台湾大学 法律研究所
修士課程三年 徐雅筑



今回の訪日事業の参加者としてお選び頂いたことを光栄に思っています。充実した、豊かな日程でした。

初めて日本に行ったのは冬で、自然風景はどちらかというと単調なものでした。今回は秋に日本を訪





れたので、美しい植物を見ることができ、温帯地域と亜熱帯地域の違いを感じることができました。

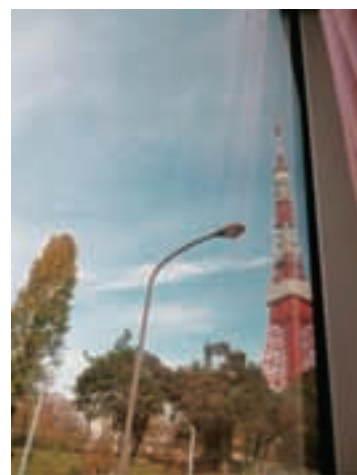
私の発表は東京大学で行いましたが、評者をして頂いた新田龍希先生は私の研究テーマについてとても役に立つ提案をして下さいました。しかし、今回の学術交流では、「専門分野の違いは山を隔てるがごとし（専門分野が異なれば全く分からなくなる）」という道理を、身をもって理解しました。皆の英語のレベルは非常に高いのですが、異なる学術分野の知識は、短い時間の間でなかなか簡単に聞く人に理解してもらうことはできません。今後は、事前に文書で資料を提供して頂ければ、他のメンバーの研究テーマも理解しやすくなるのではないかと思います。もちろん、平易な言葉と文字で自分の研究の概要を説明することも、今後の学術的執筆活動において努力が必要なところではあります。また、東京大学と台湾大学は過去どちらも帝国大学の系列に属していたこともあり、両校のキャンパス風景は似ている部分があり、見学時の興味も増しました。下の画像、建物の様式とレンガの壁は台湾大学の日本統治時代に建てられた校舎とよく似ています。

東京の地下鉄は噂に聞いていたとおり複雑で、しかもどういうわけか、駅構内での移動の動線が左側通行なのか右側通行なのか一定ではないよう



でした。自由時間が遅かったので、あまり大量の人混みに会うことはありませんでしたが、駅のことをよくわからない人がラッシュ時にぶつかった時は出入りの仕方に戸惑うかもしれません。

東京で最も印象深いことといえば、滞在していた数日の間にバスから見た美しい街の風景でしょう。木の種類が違うのか、あるいは都市が発展した時間の長さが異なるのか、台北に比べて東京の街路樹は不思議なほどに壮観でした。忠孝東路の街路樹を「並木」と呼ぶならば、東京の街路樹はほとんど「ジャングル」と言ってよいでしょう。修復が終わったばかりの東京駅は、元々の姿を取り戻し、しかも時代によって変化していないモダン建築で、とても驚き、うらやましくすら感じた





出来事でした。

江戸東京博物館もとても気に入った訪問先でした。案内のシステムも非常に詳しくこの大都会の発展の歴史を紹介しており、各種の文物や建物の模型などもあって、過去の生活の姿をイメージしやすいものになっています。しかし、これだけ大型の博物館を午後の時間だけで見学しつくすのはやや大変でした。今度東京に来る機会があれば、もう一度訪れてみたいと思います。

東京に比べて、滋賀県に滞在した時間はあまり長くはありませんでしたが、この地域に住む方たちの、故郷に対するアイデンティティと自信を強く感じさせられました。琵琶湖見物のガイドをして下さったNさん、日野商人館のスタッフの方、民泊先のお父さん、お母さんの言葉からも、皆さ

んがどれだけこの土地を愛し、どれだけこの自然と文化的財産を誇りに思っているかを感じ取ることができ、日本、あるいはこの土地の家庭教育や学校教育の中で、特に郷土教育を重視しているがために、このような地元愛にあふれる県民が生まれたのではないかと思ってしまうました。

民泊をした一昼夜は非常に特別な体験となりました。食事やおやつの準備をする中で、日本人が食べることをとても大切にしていることを目にしました。一日三食は質、量ともに全くおろそかにすることなく、パン一個とコーヒー一杯で済ませることに慣れてしまった私達にとっては、衝撃的ともいえる教育になりました。今回の旅程での朝食はいずれも大変豪勢でしたが、ホテルのビュッフェによる豪華な朝食と、普通の家庭で食べる豪

勢な朝食は、全く別なものに感じられました。また、日本人の女性が結婚後に仕事から離れてしまう理由もいくらかは理解できました。これだけの家事の量は、仕事をしている女性にはとても対応できるものではありません……

中高生の時に、山村美紗の推理小説をたくさん読んでいましたので、京都にはずっと憧れていました。今回京都に三日間滞在でき、作家が描いた風景に立つことができ、とても嬉しく思いましたが、昼間の自由時間が非常に少なく、少し物足りない気もしました。

京都は新旧が調和を持って共存している都市で、主要な道路にはビルが林立し、他の都市と大差ないように感じられます。しかし、脇の小路に入ると、古くからの町家が依然として良好に残されています。他にも、数多くの寺院や古跡が近代的な街の中に存在し、道では時に着物を来た姿に出くわし、街全体が色とりどりでありながら、雑多な印象を与えません。

今回は多くの美しい風景を目にすることができ、充実した時間を過ごすこともできました。自分自身で旅をする際には到底触れることのできない体験が数多くあり、交流協会からこのような日程をご手配頂いたことに感謝しています。さらに、今回の訪問を機に、多くの面から日本という国を理解できるようになりました。

2012「台湾大学院生訪日団」感想レポート

国立政治大学 外交研究所
博士課程4年 李思嫻



日本、多くの台湾人にとって、馴染み深い一方で疎遠な国でもあります。日本のポップカルチャーは台湾社会に対して、他に並ぶものがない

ほど大きな影響力を持っていますが、日本の伝統文化に対する理解は一知半解に留まっており、日本の本当の姿を探索することが私の長年の願いとなっていました。今回、交流協会による訪日事業に参加する幸運を得て、自然と頭の中の困惑が解けることを期待していました。短いフライトを経て、東京羽田空港に到着しました。飛行機がずっと乱気流に見舞われていたため、空港を出るときには頭がぼうっとしていましたが、冷たい風が吹いてきたときに、空気を目一杯吸い込み、冷たく新鮮な空気を頭に送り込みました。日本の土地を踏んだとき、私にはこれから素晴らしい出来事が始まることがわかりました。

おおまかには、今回の日程は学術交流、歴史巡礼そして文化体験の三つからなり、全体的には日本が観光客に与える強烈な比較の体験や、日本が擁する高度に発達した科学技術、夢や絵画のような自然の風景、正確な商取引、戸惑ってしまうほどの礼儀正しさなどが印象に残りました。これらの矛盾が、9日間のタイトなスケジュールの中でひとつ残らず目の前に現れてきました。

まずは、最も緊張する学術交流です。政府機関では、防衛省防衛研究所と経済産業省を訪問し、お互いに面と向かった座談会で、日本政府がアジアの重大なテーマをどう見ているのかを知りました。このような一次資料が得られることは、書籍とは比べ物にならないくらい価値のあることで、とても貴重な経験でした。また、東京大学、神奈川、立命館大学での学術発表では、英語での発表は初めてではなかったとはいえ、またひと味違った感覚がありました。民族性の違い、日本人ならではの「礼儀」とでも言うべきでしょうか。西洋の国で座談会に出席した経験をいうと、相手は遠慮なしにテーマへの見方と論文への批判を出してきて、否応なく舌戦が繰り広げられます。しかし、日本の教授は私達への愛情と思いやりからでしょうか、論文へのアドバイスという方法は比較的奥



東京大学での学術発表

ゆかしいものでした。

その次は歴史巡礼です。最も強く印象に残ったのは、国際平和ミュージアムでした。始めは、広島平和記念館と同様に、戦争が日本にもたらした大きな痛みを展示し、平和の尊さを伝えるものだと思っていましたが、意外なことに、国際平和ミュージアムで私は日本人が歴史上の出来事を取り扱う厳粛な態度を目にしました。

最初に目に飛び込んできたのは、慰安婦に関する一連の写真と戦争での虐殺の悲惨な光景でした。日本が加害者としての立場から歴史的記憶を保存し、反省をしていることを意外に思い、外国は日本人が過去の行為に向きあおうとしていないと誤解しているのではないかと思いました。特に、ガイドの方ご自身が第二次世界大戦を経験されており、成長してきた背景と時代的な意義から、日本の未来に対する憂いを語って下さいました。ガイドさんは日本の若者が歴史をしっかりと理解しようとしないうこと、日本人の優柔不断な民族性についてお話しされました。プライドの高い民族にとって、「歴史と向き合う」というのは非常に勇気のあることだと思い、日本に対する敬服の思いが燃え上がってきました。国際平和ミュージアムは、あらゆる災難や戦争は、起こる前に食い止めるべきであることを強調しており、ここでは大國



着物体験

の積極性と慎重さを目にしました。多くの点で台湾も参考にする価値のあるものがありました。

最後は、出発前にとっても楽しみにしていた文化体験です。妙心寺の退蔵院での坐禅は生涯の内でもめったにできない良い経験でしたし、着物を着て清水寺を見物するのも、大切な記念になりました。西洋人から日本人に間違えられ、記念撮影まで求められてしまいました。清水寺の紅葉にうっとりさせられ、伝統的な衣装を着て世界遺産である旧跡を体験するのはまた格別な味わいがありました。最も印象深かったのは、滋賀県日野町の農家での民泊体験でした。日本語があまりうまく喋れないので、楽しみにしつつも、辛い思いをしな



民泊先のご家族と記念撮影

いかと心配する気持ちでこの日を待っていました。幸いにして、民泊先のご家庭は、台湾から来た子供達にとっても親切にして下さり、不安で一杯だったのが、少し元気になることができました。

数日間の日程の中で、折にふれて日本文化の細やかさが現れてきました。知識の保存と維持には、さらに震撼させられましたし、日本人がこのような完璧な場所を持っていることを羨ましく感じました。各大学の美しさは言うまでもありませんが、美しいキャンパスに身を置くと、ここで勉強することがそれぞれの心のあこがれとなりました。学問の知識の中に身を浸すと、知識とは力であることを感じました。学术交流の合間に、東京と京都という2つの美しい都市の、他とは異なる特徴を感じる事ができました。東京の生活リズムはとても速く、急ぎ足で歩いて行く人々には、その体から発せられる自信と誇りを感じ、活力と希望に満ちているように思えました。古代の雰囲気豊かな京都に来ると、身も心もエネルギーを得たような、気持ちの安らぐ思いがしました。

最も大切なこととして、交流協会が私達を訪日団に参加させて下さったことに感謝しています。特に、李先生、Sさん、通訳のHさんとTさんは道中苦勞して引率、注意をして下さり、本格的な日本の食事に連れて行って下さいました。あまりにも多くの感謝と感動のすべてを「お疲れ様でした」という言葉にしたいと思います。また、民泊先のご家庭のご親切のお陰で、外国に来てふるさとに帰ったかのような温かさを感じることができ、おもてなしと励ましを下さったことに感謝いたします。最後に、今回の訪日でたくさんの友人を作ることができました。メンバーたちはそれぞれに素晴らしい能力を持ち、それぞれの無限の情熱と活力のおかげで、私達は期間中も一致団結することができました。ぎっしりと詰まった9日間の旅を終え、時間の沈殿を経て、それぞれの未来に対する考えが少しずつ熟成され、現実のものになると信じています。

東アジア研究訪日団旅行の感想

国立政治大学 日本研究所
修士課程一年 頼裕強



一、日本の教授、学生との交流：

東京大学での交流会は、大学生や修士生よりも、博士課程の院生に多く出会いました。奇遇なことに、東大では多くの学生がこれまで、そして最近も政治大学と留学生を交換しており、中国語も通じたので、交流では三種類の言語を混ぜて使うことができました。初めて訪れた東大をぶらぶらと歩いていると、クラシカルな味わいに満ちた建物とキャンパスの雰囲気などが、同じく旧帝大である台湾大学とよく似ていました。初めて訪れた赤門の興奮の余韻は、今も残っています。今回、東大生の口から初めて聞いたのですが、東大の新入生は最初に駒場キャンパスに入学し、3年次以降に本郷で授業を受けるのだそうです。そのため、2つのキャンパスの雰囲気は大きく異なっています。しかし、大学院生の分布状況についてはお話を聞けませんでした。

東大に対しては、敬意と好奇心を持っていましたが、東大の川島真准教授と助手の方、学生たちは皆気さくな方ばかりだったので、少しホッとしました。



ました。東大では台日関係に注目している新しい友人をたくさん作ることができ、過去に縁のあった日本人の友人との絆も深めることができ、温かな気持ちになることができました。

神奈川大学で交流したのは大学生で、博士課程の院生とはお話しする機会がありませんでした。今回は、ある日本の男子大学に戦後、国共内戦、海峡兩岸情勢の形成の過程と近況という台湾の近現代史についてお話しをしました。この学生はまだ1年生で、現在の台湾の政治について知らなかったもので、少しは台湾についての理解を深めてくれたのではないかと思います。今後、沢山の学生と台湾事情について話してくれることを願っています。

この他、日本の女子大生に、台湾の芸能人や歌手について知っているか尋ねてみましたが、残念なことに華流の存在を確認することはできませんでした。東大の大々的な規模に比べ、神奈川大学で交流イベントに参加した学生は少し数が少なかったですが、佐橋亮准教授は最も言葉に魅力があり、訪日メンバーたちの研究に対する意見を積極的に発表して下さった教授でした。東大よりも積極的な研究会への力の入れようになり、大変勉強になりましたが、プレッシャーも強く感じました。特に、米国留学をしていた博士課程の院生は、修士の私たちに対して深く切り込んだ意見を出して下さいました。質疑応答のレベルが噛み合わず、交流の成果が大きかったとはなかなか言えませんが、ショック療法による教育を受けたという感覚がありました。

立命館大学では多数の外国人学生に会いました。立命館大学での交流会は、外国人学生の最も多い場となり、英語がかなり重要なものになりました。立命館大学国際関係学科の教授お二人と院生はみなさんととても面白い方々で、私の発表したテーマは台湾で流行している日本のサブカルチャーに関するものなので、エヴァンゲリオンや



ゲーム、マンガ、そしてそれらのものが台日関係にどのような影響を与えているか、台湾の日本に対するイメージの確立などを語り合いましたが、交流時間は極めて限られており、今後のご縁を期待したいと思います。全体的に、英語が非常に重要になりましたが、雰囲気は神奈川大学のときほど厳粛ではありませんでした。プロフェッショナルかつわかりやすい素晴らしい意見を得られたことも、面白かった点でした。

二、日本の組織との交流：

今回は、政府機関、研究所、博物館、寺院を訪問しました。

防衛省防衛研究所は太平洋戦争時期以前、旧日本帝国陸海軍の史料を数多く収集していましたが、無数の空襲、日本が終戦の際に軍事機密を処分したこと、米軍による占領期などのために散逸してしまっており、史料はやはり完全な形では残っておらず、民間の個人の記録に頼る必要があります。歴史学部卒業の私は、それらの史料に強く惹かれ、感じる場所がありましたが、時間が差し迫っていたため、専門性を発揮することも好奇心を満たすこともできませんでした。しかし、多くの資料はデジタル化によって海を越えてネットによって調査することができますので、これは日本国外の研究者にとっても大きな福音となるでしょう。

経済産業省と科学技術振興機構(JST)という研

究機関で、日本の専門家とエリート官僚に出会うことができました。経産省は政府の重要機関であり、厳粛な雰囲気の前にはメンバーたちは楽しみ半分の気持ちをしまいこんでしまいました。経済産業省産業構造課でのブリーフィングでは日本経済発展の現況と政策方針をお聞かせ頂き、さまざまメンバー達は活発に質問を始めました。私も質問をしたかったのですが、時間の関係で切り出すことができませんでした。経産省のブリーフィングには、忘れずに日本のコンテンツ産業に関する内容にも触れられていましたので、この点を確認できて満足しました。

江戸東京博物館には日本の開国、戦後に対する誇りが見られました。

国際平和ミュージアムには、日本を始めとする国による第二次世界大戦のあらゆる行為が生々しく展示されていました。共通点としては、平日は毎日小中学生の団体が見学に来ていました。これまでずっと、極右的な教科書や日本政府の謝罪しない態度に強く影響されてきましたが、今回、防衛研究所での説明や国際平和ミュージアムでの真実の展示などを見て、日本人は現実に行うことのできる処理をしたために、外交問題の部分は極めて小さくなっていると考えており、残っているのは民族の恨みという問題だけだということが理解できました。ここに至り、私は、米国に保護された昭和天皇は生前にしっかりと謝罪を行い、手本を示すべきだったと思いました。

MIHO ミュージアム

東京という大都会を遠く離れ、京都附近の清水寺で着物を体験しました。清水寺の他には、妙心寺退蔵院も参拝しました。坐禅を指導して下さった和尚さんは、堅苦しいイメージをいくらか少し取り除いて下さったように思います。笑顔ははっきり見て取れましたが、その真剣な説明と実施の際の取り決めには、安心するとともに尊敬の念が



生まれました。京都の寺院で目にした庭園も印象深く、輝くような紅葉は、とても見尽くすことのできない美しさでした。

三、日本の農家との交流：

Y家は夫婦と息子さん3人の小さな家庭ですが、息子さんは少し出てきて挨拶をただけで、その後はずっとYご夫妻との交流となりました。日本の旧跡やその保護、修復技術は本当に噂に違わないものでした。一夜を過ごした日野町は、道路の配置が江戸時代と変わっていませんでした。(ハイブリッドカーが江戸時代の建物の間を行き来しているのも面白かったです) 地元の方々が従事している家業や技芸、建築なども実際に祖先から受け継いだものです。残念だったのは、若者が



そこから離れてしまい、伝統文化が失われてしまっていることです。

四、東京の感想：

山手線のおかげで、二晩の自由時間では新宿、渋谷の繁華街を歩くことができ、その後は品川駅のホテルに戻りました。新宿で移動していると、選挙のような群衆を目にしました。その中で、全身を鹿目まどか（訳注：アニメのキャラクター）のピンク色の服に身を包んだ女性がビラを配っていた姿が特に目を引きました。新宿で印象に残ったのは、巨大な新宿駅や、デパート、家電量販店などです。渋谷では、おしゃれな服を着た若い男女ばかりを目にしました。奇妙なギャルにナンパされたような気がするのですが、何かトラブルになることが怖く、言葉もわからなかったので、立ち止まってお話ししなかったというエピソードもありました。

書店では、書籍の分類が非常に細かく正確なこと、店内で立ち読みしている人が多いこと、中古市場の規模がとても大きいことを目にしました。一冊 105 円の古本屋に行きましたが、CD、DVD、BD なども販売していました。全体がレンタルショップになっているビルにも行き、掘り出し物を探したいと思いました。渋谷のある書店で本を買ったとき、うっかりしていて閉店前の最後のお



客さんになっていましたが、店員さんはきちんと対応してから閉店してくれました。

浅草寺では台湾の夜市に似た雰囲気を感じました。ぎっしりと両側に並んだ店を見ながらぶらぶらと歩くことができ、ブランド品や扇子、服、アクセサリーなどが売られており、食べたり遊んだりすることができます。近くには商業地区が形成されており、寺を中心として、台湾の龍山寺のような雰囲気があります。多くの観光地や博物館、駅では犬のようなマスコットをたくさん目にしました。コロコロとした姿でぬいぐるみにもなっていました。全体で企画した後、一斉に採用したのだろうと思いました。

東京スカイツリー、東京タワーは東京の市街地から簡単に見つけることができますが、じっくり撮影する機会があったのはスカイツリーの下にいた時で、東京タワーを撮影する機会があった夜、私はホテルから出ませんでした。スカイツリーに登ったときの感覚は、台北 101 と大差ありませんが、エレベーターは素晴らしく、ぎっしりと乗り込んだ見物客を乗せてすごいスピードで上昇しました。お土産は、スカイツリー限定版の東京ばな奈くらいしか印象に残っていません。

スカイツリーの下にある店を見る時間を犠牲にして、新宿の映画館「新宿バルト9」に駆け込み、先を争ってエヴァンゲリオンの第3作を鑑賞しま





した。今回、日本の映画文化については、券売機が先進的で、飲食物がとても高く、ロビーは小さく、周辺には独立した店がたくさんあることに気づきました。予告編の上映前には話し声も聞こえました。予告編の内容も豊富で、本編は最初から最後まで静まり返っていて、映画に没頭することができました。画質、座席、音響は言うまでもありませんが、前の椅子にあるカバンをかけるためのフックはとても素晴らしい気遣いだと思いました。

五、日本社会への感想：

夜半に駅にいる日本人は、お酒を飲んできた様子で、複数人で大声、小声で話しながらフラフラと歩いています。これが、彼らの集団生活であり、毎日の仕事の重要な一部分のだろうと思いました。

繁華街では、コンビニの数は台湾と変わりませんが、店の種類は台湾よりもやや多いようです。コンビニは台湾と最も似通った部分だと思います（そもそも同じ企業がコピーしたものですから）が、レジの雰囲気、列の作り方、お金の受け渡しの仕方といった細かな気配りが多く見られました。

日本の様々な姿の人は、皆身なりをきれいに整え、颯爽とした面持ちをしています。夜中も忙しく働く労働者たちも、秩序よく、協力して仕事をし、髪型も実におしゃれです。やや鋭く力強い（直接目を合わせるのははばかられますが）目線に、少し

ずつ日本人の特徴がわかってきた気がしました。

アニメやマンガは生活の一部として融合しており、これほどの情報量の中では、もはやあまり認識していなかったり、まったく知らないということの方が不思議なくらいになっています。大量の広告やお知らせは図案で提示されています。また、選挙ポスターの貼られる位置や数も実に正確で、目を引き、美しく、無駄がありません。看板を並べる方法で、互いに干渉しないようになっており、相争って目立とうとし、ライバルを覆ってしまうような台湾の方式よりも良いものです。人に迷惑をかけないという気持ちの現れでしょう。日本でトイレに行き、入浴し、眠るのは本当に幸せなことで、引きこもりがいるのも無理はありません。飲み水にもあまり悩む必要はなく、暖房や、ハイテク便器などはもはや反則的ですからあります。

日本の道路は実に複雑で、高架橋あり、歩道あり、歩道橋あり、インターチェンジあり、踏み切りあり、さらには地下道、地下鉄、複雑な線の描かれた道路や川など、バスの運転手さんが私達を乗せてやすやすと東京都内を行き来するのには、本当に感心してしまいました。観察していると、東京ではダウンジャケットを着ている人は多くなく、目立つ色のダウンを着ているのは観光客である可能性が高いです。何枚も重ねた上着やブーツを多く見かけました。また、冬に女子高生が超ミ





ニスカーを履いているというのも実話でした。滋賀県で見かけた中高生は、比較的厚着でした。

六、日本の行動の価値観への感想：

電車、新幹線はとても静かで、特に日本人は皆眠っていました。しかし、席を譲るという行為は見られませんでしたが(台湾のメンバーが先に譲っていました)。どちらかという、乗客はそのまま立っていればよいと思っているようです。

日本人は毎日6時過ぎに起きて、元気満点の日本式朝食から始まり、新聞を購読する習慣があります。店は大体8時から9時に閉まってしまう。今回聞いたところによると、通勤に1、2時間かかるのはごく普通のこと、仕事の他にも、リラックスしたり、家族と過ごしたり、レジャーに割く時間も必須です。これも、適切なときに適切なことをするという事なのでしょう。正しい時間に、正しい体で、正しいことをするという事です。

七、日本の美食についての感想：

今回食べた美味しい食べ物はいくつかありますが、共通するのは、盛んな飲酒の文化と順序の美学が織り交ぜられていることです。初日の夜の歓迎会は、居酒屋体験でした。全部で10種類ほどの創作料理で、お酒によく合う肉や揚げ物、生もの、きれいに作られた料理やデザートなどがあり、

東西のエッセンスがすべて揃っているといえるものでした。前菜の山芋には卵が入っていて、とても美味しかったです。特筆すべきは、ビールやウォッカ、ウイスキーや日本酒、カクテル、ソフトドリンクなど、すべて飲み放題だったことです。

送別会は大阪の中華料理レストランで、台湾料理を体験しました。ほとんど台湾のレストランと変わりませんでしたが、下処理された毛蟹を道具で簡単に身をほじくって食べることができるというのは初めての体験でした。また、大腸麵線も食べました。ある夜、楊国松やメンバー達と本格的な居酒屋を体験し、機械で注文したり、ビールの飲み放題を選んだりもしました。その時は本当に足元がおぼつかなくなるくらいまで飲みましたが、気持ち悪くなったり、人に迷惑をかけたりすることがなかったのは幸いでした。注文した焼き鳥は肉汁が多く、卵焼きや豚肉を焼いた料理も素晴らしかったです。ホテルは毎日ビュッフェで朝食を食べましたが、二種類あって、ひとつは日本の伝統的朝食で、魚、漬物、味噌汁、ご飯、納豆、温泉卵などがありました。洋風はサラダ、パン、煮込み料理、蒸し物、焼き物、肉類などがありました。このような朝食を毎日食べることはできましたが、特に牛乳が美味しかったです。

ある日の昼食は大地の贈り物というレストランで、朝食に似たビュッフェ形式でしたが、新鮮さと健康が強調されていた点がやや異なります。特に、日本式のお菓子は地元の黒糖が使われていて、本当に美味しかったです。東京で食べた別の昼食は、外観は西洋レストランのような店で、食べきれないほどの刺身が乗ったちらし寿司で、素晴らしく完璧な定食といえるものでした。しかし、コーヒーの種類が少なすぎ、アイスコーヒーがなかったことが印象に残っています。京都の近くでは洋食を食べ、メインディッシュはハンバーグステーキでしたが、これまで食べた中で一番美味しいハンバーグで、パンも絶妙、おかわりも自由で



した。また、スタッフの態度もやはり素晴らしく良かったです。

3つの大学でのレセプションはすべて立食で、乾杯のために大量のビールが用意されていました。食べたものはどれも似通っていましたが、神奈川大学と立命館大学ではお寿司が比較的多かったです。立命館のお寿司は本当に美味しく、食堂も大きかったです。大学での交流レセプションでは、西洋風の料理が主で、和食はあまり多くありませんでした。

農家でのホームステイで食べたお寿司には驚きました。刺身、錦糸卵、海苔、酢飯、棒ダラ、醤油などをそれぞれ別のお皿に盛り、好きなものを巻いて食べることができました。これまで食べた中で、一番新鮮で、一番美味しいお寿司でした。

お米は一流、味も一流、新鮮さも一流、選択も一流でした。農家ではその場で焼くお好み焼きと広島焼きも食べました。美味しかったです、すぐにお腹いっぱいになってしまい、漬物の入った昔ながらのおにぎりも食べました。ビール、日本酒、日本茶も沢山飲みましたよ。

ある日の朝食は、出前のサンドイッチとジュースで、モスバーガーをさらに豪華にしたようなものでしたが、伝統的な赤い箱に西洋風の朝食が詰められたものが届きました。バスで、コンビニで予約していた高級なお弁当も食べました。日本のお弁当は副菜が多く、主菜もとても美味しかったです。これであまり高くなければ、もっと好きになっていったと思います。

映画館のカフェで食べたベーグルと紅茶は高くても美味しかったです、8の字型の容器とサービスの態度はとてもよく「デザイン」されていました。

比較的体にやさしいのは、湯葉料理と精進料理です。湯葉料理はすべて豆腐で作られ、およそ8種類の料理がありました。温度と味付け、作り方の違いから、一皿一皿のごちそうへと進歩してきたものです。特に美味しかったのは、ごまだれと柚子胡椒のついた豆腐でした。精進料理はお寺で提供している素食で、見どころはピーナッツのタレを使った芋で、こんなに美味しい芋は食べたことがありませんでした。他は、日本のお米、漬物、



デザートなど、どれも美しく繊細に作ってありました。

八、まとめ：

初めて訪れた日本での9日間の旅行は、今年参加した院生の一人として、私にとって大きな意義のあるものでした。初めて自分の知識、学んできたこと、長年勉強した日本語を活かすことができ、日本人の友人や日本文化に自ら接して交流したことで、非常に満足し、勇気をもらいました。今回は関東、関西の最大都市を訪れましたが、今後は、日本の他の都市に行く機会があればと思います。修士課程で、今後のさらなる良い関係のため、学問に邁進するこの数年間でさらに努力して、双方の関係のために努力したいと思っています。

2012年台湾大学院院生訪日の感想

国立政治大学 日本研究所
修士課程1年 楊国松



1997年、まだ中央警察大学で勉強していた頃、そして初めて日本という美しい国を訪れた頃、学校の交換留学生として、九州の別府で一ヶ月あま



りの日本語学習体験をしました。そこでは日本の歴史、人文、文化だけでなく、流行産業についても大いに興味を持つようになりました。卒業後は警察で働きましたが、仕事がどれだけ忙しくても、毎年時間を作っては日本へ旅行に行っています。

2012年、幸運なことに交流協会主催による「台湾大学院生訪日団」に参加することができました。全国各地の大学院のエリート達が集まり、日本へ行って論文を発表し、学術交流を行いました。台湾に戻ってから今まで、この9日間、美しい日本の国で起こった全てのことを、美しい夢のように繰り返し思い返しています。

初日、東京品川のホテルにチェックインし、交流協会からは「手作り日本料理」による歓迎会を開いて頂きました。東京本部のK部長の親しみやすくユーモラスな中国語の挨拶の後、訪日の日程が賑やかな雰囲気の中で幕を開けました。翌日は、東京大学本郷キャンパスという日本で最も優秀な学生たちが競う殿堂に行き、「赤門」という狭き門を仰ぎ見ました。大きくはありませんが、目を閉じて「天下の英才はことごとく東大より出る」という言葉を思いました。一億三千万近い人々の中で、どれだけの学生が東大に進むことができるのでしょうか。どれだけの試練を経れば、衆を抜き出て、万人の上にある東大の人物となれるのでしょうか。

今回の訪日で、私にとって最も特別なのはやはり東京スカイツリーです。ここ数年、日本が観光資源開発として東京に新たなランドマークを建て、今年（2012年）完成したものです。てっぺんに登り、品川の方向を眺めると、かなり低くなってしまった東京タワーを見つけました。日本の戦後復興の象徴は、オレンジ色をして静かにそびえ立っていました。目もくらむような鮮やかな大迫力の夜景の中で、やはりその存在は無視できません。スカイツリーの頂上に立ち、思う存分目を楽しませた一方で、自分が日本の新たな時代のス

タート地点に立っていることを思いました。

学術論文発表、つまり今回の訪日の核心が日に日にやってきました。各校の実施方式はそれぞれ異なっており、東京大学の川島先生は学生の自由に任せ、評論も同校の博士課程の院生が行い、質問していました。全てのテーマが東大の院生と博士生の主導で行われ、東大の自由な学風が存分に発揮されていました。「神奈川大学」の佐橋先生は流暢な英語で全ての進行をされ、関西の「立命館大学」では足立先生・本名先生のお二人が交互に質問を行い、池田前交流協会代表が総括をされました。19人の大学院生代表団のメンバー達は、それぞれの頭脳に衝撃と洗礼を受けていました。異なる国の院生が、同じ問題に対して異なる見解と視点を持つことを理解し、本当に今回の訪日には意義があったと感じられました。

政府機関への訪問では、防衛省の研究機関から台湾には存在しない科学技術振興機構、中央の霞が関の経済産業省までにも行きました。日本の官僚の方々は、訪問した私たち台湾の院生訪問団に十分な資料を用意して下さいました。対談と質疑応答の厳粛さ、各プロセスの正確さと周到さが強く印象に残りました。霞が関の庁舎ビルからは国会議事堂を眺めることができました。ちょうど総選挙を控えている時期でしたが、台湾の選挙期間のようなお祭り騒ぎの賑やかさはなく、政権交代を控えている秋の雰囲気は少しも感じられませんでした。日本人は政治に対して冷淡なのか、それとも民主的素養が高いことの現れなのかはわかりませんでした。

京都へ行ったのは、ちょうど紅葉のシーズンで、昨年(2011年)4月に嵐山に花見に行き、小さな列車に乗って嵐山の峡谷の美しさを味わったことを思い起こしました。やはり観光客でごった返していましたが、世の中は時と共に移り変わり、人も変わっていきます。桂川の渡月橋で、自分のカメラでその全てを撮影していましたが、内心の思

いの起伏や思うことも多く、ほんやりと、散ってもなお直立している対岸の楓の木を眺めていました。まさに心中のもの寂しさを表す風景で、寒風が一吹き襲ってくると、私も上着をしっかりとかき合わせました。最初に集合場所にやってきたメンバーは、もう一度桂川を見ようと振り返っていました。今年自分の身に起こった人事異動にはすでに平気で向き合うことができるようになりましたが、いつの間にか涙がこぼれていました。

その後、滋賀県日野町の民泊先の家庭を訪れ、私と台湾大学の林宣佑、東呉大学の彭凡の3人は、Mさん一家4人(お父さん、お母さん、娘さん、おばあさん)のお宅に泊めてもらうことになりました。MさんはNTT(台湾の中華電信に相当)を退職され、竹細工を趣味にしています。普段は奥さんと一緒に裏庭で作物を植えて、自給自足をし、可愛い娘さんもおられます。高校卒業後にJR(日本の国鉄)に勤務しているそうで、このことについて私はMさんに日本社会の観点を質問しました。Mさんによると、日本ではごく当たり前のことだそうです。大学に入るのは自分の他の分野での能力を伸ばすことに他ならず、人脈を広げて社会での競争力を高めることにもなります。Mさんの考え方は台湾社会の、高校生は卒業後に進学をせざるを得ないという宿命とは明確に異なっています。また、日本の環境エネルギー政策が着実に推進されていることについても、目を見開かれる思いがしました。M家では太陽電池パネルを取り付け、自給自足を以外にも余剰電力を電力会社に売っているのだそうです。台湾でも参考にするに値するエネルギー政策だと思います。M家では、一宿二食だけお世話になりましたが、こういった活動が初めての私たちにとっては、全く新しい感覚があり、M一家と私たちは台湾で会うことを約束しました。これも一種の国民外交なのでしょう。

妙心寺の「坐禅体験」では、和尚さんが「警策」



で後ろから「激励」として叩いて下さいます。坐禅での呼吸、そしてしっかりとした姿勢で魂を浄化するというトレーニングは、遠く台湾から学びに来たものにとって、実に豊かな文化的饗宴でした。黄、赤、茶色など、きらびやかな色彩の入り交じる紅葉の寺の中で、私たちは寺の「瓢鮎図」を眺め、和尚さんはこの漁師が真理を追究する意義を熱心に説明して下さいの話を聞いていると、まるで日本の数百年の時空を超えたような感覚がし

ていました。古今の交錯する静かな寺にいと、長く世俗の世界で乱れてしまった心が、少しずつその霊性によって浄化され、癒されていくような気がしました。

最後の夜、わが国の大阪弁事処の処長が自ら送別会を開いて下さり、特別に在日台湾人のコックによる大腸麵線を振る舞って下さいました。ふるさとおなじみの料理が出てきて、皆驚き、乾杯してともに飲みました。しかし、旅が終わりに近づいていること、別れを告げる時間であることも知っていました。

この世に終わりのない宴会はありません。驚きと不思議の冒険の時間は短いものでしたが、毎日とともに過ごし、私たちは友情を深めることができました。特に、交流協会が心を込めて日程をご手配下さったことで、今後、メンバーはそれぞれが自分の分野で、全力で日台の友好関係を促進し、日台交流の土台としての役割を発揮してくれるはずです。